

其夜は源太床に入りても中々眠らず、一番鶏二番鶏を耳たしかに聞て朝も平日よりは夙う起き、含嗽ちようす手水に見ぬ夢を洗つて熱茶一杯に酒の残り香を払ふ折しも、むくむくと起き上つたる清吉寝惚眼をこすりこすり怪訝顔してまごつくに、お吉とどもも噴飯ふきだして笑ひ、清吉昨夜は如何したか、と騁なぶれば急に危かし坐つて無茶苦茶に頭を下げ、つい御馳走になり過ぎて何時か知らず寝て仕舞ひました、姉御、昨夜私は何か悪いことでも為は仕ませぬか、と心配相に尋ぬるも可笑く、まあ何でも好いは、飯でも食つて仕事に行きやれ、と和やさしく云はれてますます畏あわれ、恍然つうとりとして腕を組み頻りに考へ込む風情、正直なるが可愛らし。

清吉を出しやりたる後、源太は尚も考にひとり沈みて日頃の快活さつぱりとした調子に似もやらず、碌々お吉に口さへきかで思案に思案を凝らせしが、あゝ解つたと独り言するかと思へば、愍然ふびんなと溜息つき、ゑゝ抛なげやうかと云ふかとおもへば、何して呉れうと腹立つ様子を傍にてお吉の見る辛さ、問ひ慰めんと口を出せば黙つて居よとやりこめられ、詮方なさに胸の中にて空しく心をいたむるばかり。源太は其等に関ひもせず夕暮方まで考へ考へ、漸く思ひ定めやしけむ衝つと身を起して衣服をあらため、感応寺に行き上人まみに見えて昨夜の始終をば隠すことなく物語りし末、一旦は私も余り解らぬ十兵衛の答に腹を立てしものゝ歸つてよくよく考ふれば、仮令ば私一人して立派に塔は建つるにせよ、それでは折角御諭しを受けた甲斐無く源太がまた我慾にばかり強いやうで男児おとこらしうも無い話し、といふて十兵衛は十兵衛の思わくを滅多に捨はずまじき様子、彼も全く自己おのれを押へて讓れば源太も自己を押へて彼に仕事をさせ下されと譲らねばならぬ義理人情、いろいろ愚昧おろかな考を使つて漸く案じ出したことにも十兵衛が乗らねば仕方なく、それを怒つても恨むでも是非の無い訳、既はや此上には変つた分別も私には出ませぬ、唯願ふはお上人様、仮令ば十兵衛一人に仰せつけられますればとて私かならず何とも思ひますまいほどに、十兵衛になり私になり二人共々になり何様どうとも仰せつけられて下さりませ、御口づからの事なれば十兵衛も私も互に争ふ心は捨て居りまするほどに露さら故障はござりませぬ、我等二人の相談には余つて願ひにまゐりました、と実意を面に現しつゝ願へば上人ほくほく笑はれ、左様ぢやる左様ぢやる、流石そなたに汝も見上げた男ぢや、好い好い、其心掛一つで既う生雲塔見事に建てたより立派に汝はなつて居る、十兵衛も先刻さつきに来て同じ事を云ふて歸つたは、彼も可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつて遣れ可愛がつて遣れ、と心あり氣に云はるゝ言葉を源太早くも合点して、ゑゝ可愛がつて遣りますとも、といと清すずげに答れば、上人満面皺にして悦び玉ひつ、好いは好いは、嗚呼氣味のよい男児ぢやな、と真から底ほめから褒美られて、勿体なさはありながら源太おもはず頭をあげ、お蔭で男児になれましたか、と一語に無限の感慨を含めて喜ぶ男泣き。既此時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しくも湧たるなるべし。